

アフターケア通信

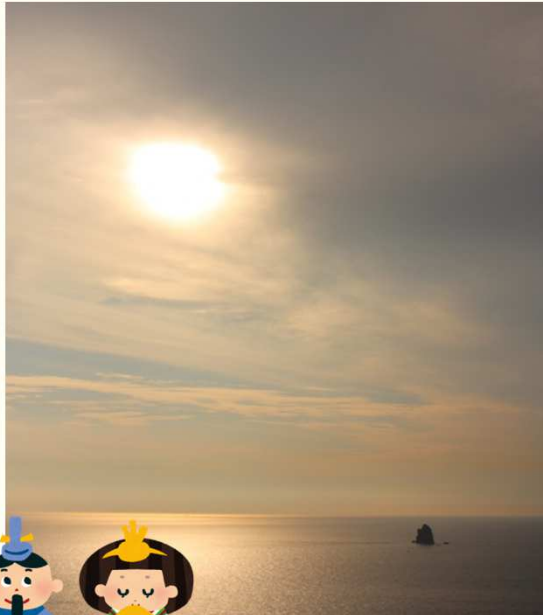
ご本尊を受けとられた貴方へ

ひがんえ
彼岸会(春)

【3月号】

【お彼岸とは】

「彼岸」とは、「此岸(しがん)」に対する言葉です。私たちの迷いの生活が生み出す世界を「穢土(えど)」と表し、その此岸からさとり
の岸(浄土という彼岸)へ向かって生きる人生を「到(とう)彼岸(ひがん)」(パーラミター、波羅蜜多はその音写)として勤める法要を、「彼岸会(お彼岸)」としてきました。さ
とりの世界を知らせていただき、彼岸のよび声(お念仏)を聞きつつ、迷いを転じてさ
とりの岸に到るという意味です。



【迷いの生活に 無自覚な私たち】

私たちの生活は、自己関心が先立って、様々な計らいをしていくのですが、その結果は、必ずしも自分の思った様にはなりません。そのことが、愚痴・悲しみ・悩みの元となります。つまり、私たちは、今自分が迷いの此岸にいることすら無自覚で、いたずらに右往左往する人生を送っているのです。

今月の門徒さん

私はお彼岸の度にお墓参りをしてきましたが、40歳過ぎまでお彼岸の意味を理解していませんでした。お寺に足を運ぶようになってから少しずつわかる様になってきました。

これからも、仏さまの教えとして説かれる「此岸(しがん)」(私たちが住む煩惱世界)と、「彼岸」(阿弥陀さまの浄土)ということ素直に聴聞し、お彼岸の時季をご縁に、ご先祖、父母兄妹、諸仏慈恩に感謝しつつ、これからも「お彼岸」を味わっていきたくと思います。



でぐち かずよし
出口 和義さん
(第1組・西光寺)





ちゅういん 中陰とは？



” 死から生を見つめ直す ”

ちゅういん
中陰とは、日本に伝えられてきた仏教の考え方です。生きもの（有情）の生（うじょう）死（しよじ）
る（る）てん
流転する過程を、生（しょうう）有（ゆう）（迷いの世界に生を受ける刹那）・本（ほん）有（ぬ）・死（し）有（しう）（死の瞬
間）、そして、次の生が決定するまでの亡くなった日を入れて49日間を中有（ちゅうう）と
して、この中有を中陰とも呼び習わしています。

私たちの思いは、亡くなった方の冥福（めいふく）を祈るところに向かいがちです
が、真宗においては、本願（ほんがん）を信じ念仏（ねんぶつ）申すことのできた人は、臨終（りんじゆう）のその時に
仏になるのだ、と教えられます。



ですから、生（私）から死を考えるのではなく、死
（仏）から生を見つめ直すことが、亡き方（うなが）から促（うなが）され
ているのではないのでしょうか。

目前の問題への対応に日暮らしをしている私たちですが、経験し、思ったこ
とは、「ただ、夢のごとし（まぼろし）幻のごとし」と言われる過去の記録でしかありま
せん。次々と過去になっていく自分の人生が、それだけなら切ないことです。

人生が、自分の生に深みを与え方向を定めていく、大切なものであることに
思いをいたすことができたなら、亡き方（うなが）の御一生（いの）は、祈（いの）るものではなく、頂（いた）
く
ものであると了解できるのではないのでしょうか。

中陰中のお飾りは、華やかなもの
ではなく、お内仏（ないぶつ）の脇（わき）に質素（しっそ）にしつ
らえて、静かに亡き方への思いを致
しつつ、ご本尊の前で我が身自身と
向き合いながら過ごしましょう。



中陰の様子